博士学位論文審査要旨

２０１７年１１月２５日

論 文 題 目：　『宇治拾遺物語』夢説話の研究
学位申請者：　趙 智英
審 査 委 員：
　主　査：　文学研究科　教授　廣田 收
　副　査：　文学研究科　教授　植木 朝子
　副　査：　文学研究科　教授　岩坪 健

要　　旨：

本論文は、鎌倉時代初期に成立した『宇治拾遺物語』を対象として、多数を占める夢説話に注目し、特に夢合せ・夢解きによって夢の謎が解読されることで説話がどのように構成されるのかという問題意識から、夢を組み込む説話の枠組みの多様性を明らかにすることによって、仏教説話集とは異なる世俗説話集である『宇治拾遺物語』の特質を解明したものである。

とりわけ本論文の独創性は、周知のような日・中間の文献資料相互の比較だけでなく、日・韓間の文献資料の比較を加えることによって、広く東アジアに共有されている夢説話の話型群の生態を解明したことにある。さらに、文献資料のみならず、韓国の国家的事業の成果である『韓国口碑文学大系』を新たに翻訳、活用して、夢をめぐる説話の枠組みが異なる地域を越えて共有されていることを明らかにしたことにある。すなわち、『宇治拾遺物語』の特質を、日・中・韓の視野において考察しようとしたところにあるといえる。

第一章では、日・韓の研究史を踏まえ、モティーフ、話型、ストーリーという視点から夢説話を分類している。第二章では、前章の分類に基づき、「夢合せ・夢解き型」について、第四話・第一六五話を、日・韓の説話と口承文芸との類似性について考察し、日・韓に共有されている夢交換の話型、夢売買の話型の問題として考察した点は特筆すべき成果である。第三章では、「夢告げ型　予言型」について、第一〇八話、第一三一話を中心に、貧困から富裕へというストーリーの転換が、もはや解読の必要のない説明的な夢の啓示によって押し進められるところに『宇治拾遺物語』の特質があることを指摘している。第四章では、「夢告げ型　説明型」として、第五七話を中心に、夢がストーリー展開において種明かしとして用いられていることを明らかにしている。また「夢告げ型　暗示型」として第一一二話を中心に、唱導的性格よりも奇怪な夢の恐怖心と人の利己心を描き出すことに、『宇治拾遺物語』の特質があると指摘している。

このように本論文は、夢説話の分類を基礎として、日本古代から中世にわたる類話だけでなく、韓・中の類話を博捜し、比較によって明らかになる夢説話の共通性と相違性を考察することで、世俗説話集『宇治拾遺物語』の説話の方法が、夢を不可欠なものとして組み込み、人の態度や行動に興味をもって生成していることを解明したものである。すなわち、本論文は日・韓の説話研究の欠落を補うだけでなく、新たな研究領野を開拓したものと評価できる。

よって、本論文は、博士（国文学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

総合試験結果の要旨

２０１７年１１月２５日

論 文 題 目：　『宇治拾遺物語』夢説話の研究
学位申請者：　趙 智英
審 査 委 員：
　主　査：　文学研究科教授　廣田 收
　副　査：　文学研究科教授　植木 朝子
　副　査：　文学研究科教授　岩坪 健

要　　旨：

上記審査委員３名は、２０１７年１１月２４日、午後６時から約２時間にわたり、徳照館２階の第二共同利用室において、公開で学位申請者に対して口頭試問を行なった。

学位申請者は、審査員からの質疑に対して、提出論文についての専門的知識はもとより、関連する諸分野の問題についても、的確かつ詳細な応答を行なった。その結果、本論文の学術的価値の高さ、および学力水準の高さが確認された。

口頭試問にひきつづき行なわれた語学（英語）試験においても、十分な語学力を備えていることが確認された。

よって、本論文に関する総合試験の結果は合格であると認める。

博 士 学 位 論 文 要 旨

論 文 題 目：　『宇治拾遺物語』夢説話の研究
氏　　名：　趙　智英

要　　旨：

本論文の目的は、鎌倉時代の説話集『宇治拾遺物語』に表れる「夢」が、説話構成においてどのような役割を果たしており、どのように説話の方法として用いられているのかを解明することである。そのために、本論文では『宇治拾遺物語』における「夢」という語を手がかりとして、夢を素材として用いる説話群を対象に、夢の役割を分類し、各説話の方法的特質について、分析及び考察を行った。とりわけ、本論文における研究方法の独自性は、『宇治拾遺物語』の出典を文献だけに限定せず、口承文芸にまで広げて考察することにある。さらに、従来『宇治拾遺物語』の研究史では、インド、中国の文献に出典の淵源を求めることが多く、隣国である韓国の伝承や説話を比較対象として取り上げることがほとんどなかった。よって、本論文は韓国にも内容の相似する事例があるものは積極的に比較対象として取り上げ、『宇治拾遺物語』研究に韓国の類話を取り入れる有効性を提示した。

なお、本論文の構成は次の通りである。

第一章では、まず先行研究を概観し、『宇治拾遺物語』における夢に関する研究の現状から問題点と課題を確認した。そして、既存の研究動向を踏まえ、『宇治拾遺物語』全巻全話にわたって説話の本文に見える計八四例の「夢」という語の用例を全て検討した。本論文では『宇治拾遺物語』の中で、夢が組み込まれている計二五話の説話を「夢説話」と定義し、説話毎に窺える夢の内容やはたらきに応じて、モティーフ、話型、ストーリー展開の三つの基準に従い、類型毎に分類作業を行った。

第二章では、第一章で分類した各類型の説話の中から「A．夢合せ・夢解き型」に該当する第四話「伴大納言事」と第一六五話「夢買人事」を取り上げ、日韓における類話関係を中心に考察した。

第四話については、文献説話『三国遺事』、『韓国口碑文学大系』に収録されている口碑説話の類似性を指摘した。比較分析の結果、『三国遺事』や『韓国口碑文学大系』等に見える事例は、最初夢解きを間違えても吉夢に解釈し直すことが許されるが、第四話は、一度夢合わせを間違えた時点で吉夢の力は夢を見た者の手から離れてしまうという特質がある。

第一六五話については、夢を売買するという類似性が認められる『曽我物語』太山寺本、韓国の文献説話『三国遺事』、『高麗史』との比較分析を行った。その結果、第一六五話は、夢がもつ意味より夢を売買する行為自体に興味があり、それまでにはなかった新しい夢売買説話の型を成しているといえる。

第三章では、「B．夢告げ型」のうち、夢の中で神仏から啓示を受け、現実の行動に影響する説話である第一〇八話「越前敦賀女観音助給事」と、第一三一話「清水寺御帳給ル女事」、第八八話「自二賀茂社一御幣紙米等給事」を取り上げ、考察を行った。この三話に表れる夢は、解釈がいらない夢であり、夢を見る前と、夢を見た後の転機の契機となる重要な役割を担っているという点で共通する。

先行研究において、第一〇八話は『今昔物語集』巻一六第七話の同文的同話と見做されてきた。しかし、第一〇八話は、『今昔物語集』巻一六第七話よりも物事に対する貧しい女の心情の変化や感想などの描写が組み込まれており、読者にとって観音の能力自体より、その不思議な出来事に対する女の境遇、思考、行動に興味を寄せる叙述様相を呈する。さらに話末評語では、男女の世

俗的幸福を描いた後日談で物語を締めるという点に特質が表れている。そして、第一〇八話において、夢がどのように説話の方法として用いられているのかを検討した。すると、夢は、受動的な貧しい女にとって、願望が叶うという確信を得る決定的な契機となっており、説話展開に大きく機能していることが明らかである。

次に、第一三一話と第八八話を中心に、『宇治拾遺物語』に描かれた貧者と夢との関係性について明らかにすることを試みた。この考察に加えて、韓国に存する夢告げによる貧者の致富譚や、底を突かない呪宝モティーフが組み込まれた事例を紹介し、『宇治拾遺物語』との類似点や相違点を述べた。

第一〇八話、第一三一話、第八八話における夢の役割を総括すると、貧困者にとって、夢は困窮からの救済の合図となり、超越的存在との交信手段として利用され、貧困から富裕への人生の転機という役割を果たしていることが分かる。『宇治拾遺物語』収載話の中で、貧者が神仏の力により利益を得る説話は、一話以外は全て夢が登場する。これは、観音利生を唱える霊験譚としてではなく、貧者が夢を見て成功へと導かれる、民衆に希望を持たせる物語を描こうとした編者の意識があったと考えられる。

第四章では、前章に続いて、「B．夢告げ型」の説明型と暗示型に該当する説話について考察した。第五七話「石橋下蛇事」は、「B．夢告げ型」の説明型に分類される。なおかつ、その夢がストーリー展開において出来事の種明かしとなっている点が特徴である。一方、先行研究では日本国内に同文的同話が見当たらないため孤立説話と見なされてきた説話でもある。そこで本論文では、第五七話の孤立話としての特質を検討すべく、夢の役割が説話展開にどのように機能しているのか考えてみた。さらに、蛇と女という共通モティーフを共有する道成寺説話を始め、韓国における相思蛇説話の諸伝承との比較を行った。その結果、第五七話における蛇は、韓国の相思蛇説話に見えるような一途な想い、恋心を打ち解けられないまま化した蛇でもなければ、道成寺説話における愛欲と瞋恚の象徴としての蛇でもないことが顕著となった。第五七話は、女が何故蛇になったかはあまり重要ではなくて、読者にミスリードさせるために蛇を登場させている。不安や緊張感、面白さを与えるための手段として、蛇と女の組み合わせを上手く利用した説話と評価できる。

次に、「B．夢告げ型」の暗示型に分類される第一一二話「大安寺別当女ニ嫁スル男夢見事」と『今昔物語集』巻一九第二〇話との本文の比較を通して、第一一二話がもつ特質を見出し、夢の役割を探ることを目指した。第一一二話は、従来の研究では『今昔物語集』巻一九第二〇話と同文的同話だと看取されてきた。しかし、第一一二話は『今昔物語集』に見える訓誡的言辞を踏襲しておらず、夢に対して罪を心に恥じる蔵人の慙愧の念は描かれない。さらに、第一一二話は僧俗の寺物私用を戒める性質を帯びながらも、同一モティーフをもつ第五五話「薬師寺別当事」に比べると、夢を見た当人である蔵人が寺物私用の罪に問われるかどうかより、夢の中の仮想体験を通して、僧俗の悪報がもつ罪深さを間接的に戒めることに重点を置いている。第一一二話は、仏教の教理へと導くための唱導的意識より、生々しく奇怪な夢の描写と、夢を通じた警告に対する俗人の恐怖心と利己心に興味をもった叙述様相となっている。

以上、本論文で行った考察から、『宇治拾遺物語』の夢説話の特質を大きく三点に整理すると、次のようである。

一点目は、『宇治拾遺物語』は、夢の内容がもつ象徴性が説話展開に直結する例は極めて少ないということである。これは、『宇治拾遺物語』全巻全話にわたって、象徴夢が第四話に見える一例と第一〇一話に見える一例の計二例のみであり、その他は殆ど啓示夢であることから理解できる。とすると、『宇治拾遺物語』の編者は、夢そのものより、夢を見る行為、夢を売買する行為、すなわち、夢を巡る人間の態度や行動に興味があると考えられる。

二点目は、『宇治拾遺物語』の夢説話は、夢を見る者が俗人である場合が、僧職者より約四倍多い割合を占めることである。この割合から、『宇治拾遺物語』において、夢や夢告げの事例が、俗

人に即して語られる傾向が強いということが顕著である。

三点目は、『宇治拾遺物語』の夢説話には、超越した存在の力に対する信仰とその信仰心が実際の成功や失敗に繋がるという考えが強く窺えることである。そこには、宗教的な根拠や仏教思想は見当たらない。『宇治拾遺物語』に表れた僧俗の夢に対する信仰は、現世利益を追究する信仰であって、仏教的土壌の上に立った信仰ではないということが明確である。

本論文では『韓国口碑文学大系』を活用し、日韓の文献説話と口承説話といった広範な横断的方法を取り入れ比較研究を試みた。そうすることで、既存の研究史において指摘されてこなかった韓国の説話資料に、『宇治拾遺物語』の類似性が認められることが明らかになった。夢解きや、夢を売買する事例は、日韓の間で文献だけでなく口承文芸においても共通している。その中でも『宇治拾遺物語』は、多くの夢売買の事例に比べ非常に特徴的な第一六五話を唯一収載している説話集である。これには編纂意図が関わってくると考えることができ、『宇治拾遺物語』の特質でもある。稿者は、日本と韓国に見える事例を並べたとき顕著となる相違性や類似性一つ一つに、文化が潜んでおり、思想が表れるものだと考える。そのため、一つのプロット、或いは話型を共有する text（本文）に、両国の類似性と相違性が表れる意味を探ることに重要性を感じる。

一方、仏教説話の夢は、超越的な神や仏からのメッセージであり、啓示である。そのことこそ仏教説話が伝えるべき重大な価値である。啓示には予知や地獄巡りの体験や極楽往生の告知など、種類は多いが、結局のところ夢による啓示そのものが奇蹟である。これに対して世俗説話における夢は、夢そのものよりも夢によってもたらされる出来事の奇異を伝えている。その意味で『宇治拾遺物語』は、宗教性がない啓示夢を「夢解き・夢合せ型」や「夢告げ型」の説話を語るために、説話の方法として上手く利用している。『宇治拾遺物語』における夢は、『宇治拾遺物語』という説話集において不可欠でかつ有効な方法としてのはたらきをしているのである。